



Title	顧城論
Author(s)	島, 由子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58779">https://hdl.handle.net/11094/58779</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	島由子
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第 52 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	顧城論
論文審査委員	主査 教授 青野繁治 副査 教授 杉村博二 副査 教授 武藤洋二 副査 教授 尾上新太郎 副査 教授 渡邊克昭

## 論文の内容要旨

本論では中国現代詩人・顧城（1956～1993）の詩的言語の変遷、特に後期作品への展開に重点を置き、顧城が求めた言葉、及び「自我」の有り様を明確にすることにより、詩人が生涯をかけて探究した「詩」の理想像を探りたい。

顧城にとって創作は父について下放した農村において、子供独特の言葉と感性により、自然との交感、融合を記したことにはじまる。

しかし、都市に戻り、社会の中で生活し、少年から青年へと成長し、自我が確立されていく中で、人のコミュニケーションのための日常言語を習得しようとした。それに伴って、社会的色彩の濃い作品が生まれる。また、西城区文化館での詩歌創作組や地下文芸雑誌『今天』を通じて、文芸理論や外国文学に触れはじめ、その作品は社会や人民の声を代弁するそれまでの詩の概念を、自己の感性をそのまま表現する「自我」の確立によって打破した。

しかし、顧城はその創作体験から、詩が夢や内面世界という「自我」の範囲を超えるところから到来することを知っていた。その探究が進むにつれて、作品は主観的な「自我」が生み出す意味やイメージの連関を失って行く。その意味とイメージの断絶と夢という詩的体験、及び主観的な「自我」の範疇を超えるものへの探究はシュルレアリストと共通するところがあった。しかし、シュルレアリスト達がフロイトの無意識によってその体験を理解したのに対し、顧城は老荘思想、禅をもとにした「自然哲学」論を提起して、理解に努めた。

「自然哲学」論において、顧城は「私」について言及することが少ない古典詩を主観的な「自我」の有無を超越した、心の有り様としての「自然の境地」を実現しているものと評価したが、その考えが文語体で創作されている「激流島画話本」（1992）に反映されている。近代化された詩人が文言に求めたのは近代的自我以前の古典的な「自我」像であり、それはもう一つの脱「自我」の試みであることを第Ⅰ部において指摘した。

第Ⅱ部では、北京帰還後の顧城の活動及び読書環境を探ることにより、それらの活動が農村より北京に戻ってからの作風の変化にどのような影響を与えたのかを考察していく。

ここでは、今まで採り上げられてこなかった顧城の西城区文化館詩歌創作組の活動に注目し、文化館の機関紙である『蒲公英』を資料に用いると共に、当時の関係者に聞き取りを行うことにより、当時の活動を再現した。

また、顧城はこれまで地下文芸雑誌『今天』の主要なメンバーとされてきたが、『今天』の前身と言われる河北省白洋淀における知識青年達によって形成された地下詩壇とは関係がなく、独自のルートで創作を続けてきた詩人であることを指摘する。彼は『今天』創刊後、その作品に共鳴した投稿者の一人であり、『今天』に参加したことで、文革中、禁書とされた5、60年代に出版された外国文学の翻訳や民間に流出した内部讀物に接する機会に恵まれ、急成長をとげた同人から大きな影響を受けた。

第III部においては作品「滴的里滴（ディダリィディ）」（1986）と組詩「鬼、城内に入る」（1992）を読み解くことにより、顧城が目指した詩の理想像と詩人の挫折を明確にしていった。

作品「滴的里滴」では、理性と非理性、言葉の生成と解体、自我の確立と解体、生と死の繰り返しが描かれており、それが「煙—水滴—空—雨—池」という水の循環によって象徴されることを指摘した。しかし、顧城が意味及び自我の有無を超越した「自然の境地」及び「自然の境地」を具現する「目的のない私」を掲げたことにより、顧城が目指したところがそのような循環ではなく、循環を超越し、主宰者として、その循環をコントロールすることにあったことがわかる。そのような循環を超越した姿は作品「滴的里滴」において、意味、及び自我の有無を超越した「水晶」の透明性に結実している。しかし、「水晶」は「転機」の到来なくして現れず、詩人はその到来に受け身であり、創作の中で、「自然の境地」を実現することはできなかった。

組詩「鬼、城内に入る」においては、詩人の分身である「鬼（き）」が曜日という時間軸を辿りながら、「城」（詩人の開かれた深層意識）を彷徨う。「鬼」と「人」の間の変換を意味する「翻（ひっくり返る）」という語は言語の生成と解体、夢と現実、生と死の変換を意味する言葉であり、詩人は作中この「翻」を繰り返すのみである。しかし、「鬼」が彷徨う「城」の世界には「翻」を超越した透明な「死んだ人」が登場し、「鬼」は「城」の深淵を見ようとするが、見えたのは「透明なポプラの木」だけであった。ここにおいても、有無を超越した「透明」性が詩人の理想とする「自我」像であり、「言語」像となっている。しかし、「鬼」はその存在を感じるか見るだけで、それを捉えることができない。

また、「風」や「雨」といった自然現象もまた「城」の中で「鬼」が把握できないものである。「鬼」は「風」には「風」で、「雨」には「碗」によって、その動きを捉えようとするが、その試みは人工のもので自然を捉える試みであり、詩人と自然の分離をより一層明確にしている。また、「自我」の中にあるにも関わらず、把握できない「城」の無限性に詩人は城を囲む壁を再構築することにより、有限性を持たせて把握しようとしただけでなく、その壁に「門」をつくることにより、自由に入り出しができるようにしようとした。それは「翻」を自ら操りたいという彼の欲望の反映である。しかし、「人」と「鬼」の「翻」は「運命」に左右され、「翻」が「運命」の手の上で「宙返り」をしている行為にすぎないことを知った詩人は自ら命を断つ。それは「自我」が「運命」に対してできる最後で最大の反逆であった。

第IV部では、顧城の自伝小説『英兒』をとり上げる。顧城は少女と大人の女性の中間にあたる「女兒」の性質、「女兒性」に美を求めた。顧城によると、「女兒性」の特徴は「清浄さ」にあり、その美は詩と天に属するものであった。顧城は自らの男性としての出生を誤りだと考えたが、やがて「女兒性」を一種の心境であることを発見する。そして、自らの「女兒性」と「女兒」の「女兒性」を「照らしあう」ことを求めた。顧城が作品『英兒』において、実在の女性・英兒に見いだしたものこの「女兒性」であった。英兒は互いに「女兒性」を照らしあう顧城の分身であり、英兒との性交は「女兒」との「天人合一」の体験であった。それは詩と「合一」する創作体験を象徴するものとなっている。また、一方で顧城は英兒の持つ女の子っぽさを前に、男性としての「力量」を發揮でき、ほしいままに振舞えた。それは受け身であった詩の創作を自らが主体的に参加したいという欲望の表れでもある。そのため、英兒の出奔は、内外の「女兒性」の喪失を意味し、詩を、自己を失う体験でもあった。顧城はそのような運命の前に自己の無力を感じ、運命に対抗するため、作品『英兒』の中で自ら死を選んだ。

顧城にとり、詩の創作は、生と死、夢と現実、言語の生成と解体といった繰り返しから解放され、主宰者としてそれらの繰り返しをコントロールし、真の意味で自由な自己を確立するためのものであった。しかし、顧城が創作の中で実現できたのは、生と死、夢と現実の境界の破壊、言葉の意味の破壊、確立された自我の分裂であり、その混沌とした世界を前に、意味とイメージの世界に舞い戻っただけである。このような意味の世界への回帰は、心の中にあるはずの自然を実現するために原始生活を始めたこと、清浄な心境であるはずの「女兒性」を実在の女性に求めたところにも表れている。

そして、創作の中で実現した生と死、夢と現実、言語の生成といった繰り返しが、詩人の思うままでなく、「運命」というものに左右されていると知ったとき、顧城は自らの死を選んで、「運命」から自由になろうとした。それは、繰り返しから解放された、透明な存在「死んだ人」になるための手段でもあった。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、詩人顧城の数々の詩作品および小説『英児』の分析を通じて、詩人としての顧城の原点から、無理心中という劇的な死に至るまでの精神の遍歴をあとづけようとした本格的な顧城論である。

はじめに

第Ⅰ部 詩的言語の変遷——顧城の「自我」論

第Ⅱ部 顧城の初期活動について

第Ⅲ部 讀解

第Ⅳ部 「英児」論

終わりに

および添付資料「顧城年譜」、「顧城関係資料」、「顧城著作目録」によって構成されている。

第Ⅰ部では、父親とともに下放生活を体験した少年時代に「自然」との交信を通じて詩的言語を獲得した顧城が、北京に戻り社会生活を始めることによって、人間との対話に困難を覚え、読書を通じて「文化的自我」を獲得しようとしたが、それに違和感を覚え、「反文化的自我」更には「無我」の境地を追求する東洋的「自然哲学」論を展開した。顧城の詩的言語の生成と自我の関係をあとづけている。ただ古代中国思想の扱い方が、伝統的図式・常識の枠内にあり、物足りなさを感じさせる。

第Ⅱ部では、北京に戻り社会活動を始めた頃の顧城に焦点を当て、第一次天安門事件への参加、従来あまり取り上げられなかった西城文化館詩歌創作組における活動を通じて、社会風刺的作品を生み出したこと、地下文芸誌『今天』の同人との出会いを通じて、これまで無意識的であった技巧の問題を意識するようになり、逆にこれらの技巧が知らず知らず無意識に使っていたものであることを自覚する過程を明らかにしている。

第Ⅲ部では、「滴的里滴」において、作中の水の循環は生と死の輪廻の象徴であり、理性と非理性の転換、言葉の生成と解体、言葉を混沌から認識する主体である「自我」の確立と分裂をも象徴し、それらが永遠に繰り返されることを表している、とし、「鬼」は顧城の分身であり、「夢」と「覚醒」、「生」と「死」の間を彷徨う、という「鬼、城内に入る」のモチーフは、「鬼」が「城」を彷徨うこの試みは「翻」の繰り返しにすぎず、その「翻」ですら不安定なものであることを指摘する。詩的体験により「城」の壁というフィルターが壊され、中身が詩人の意志とは関係なく、絶えず侵入してくるために、詩人は「レンガを積み上げ」て壁を築き、城門を修復しようとしたが、その行為さえ「運命」の手の上で「宙返り」をするにすぎないことに気づいた詩人の絶望は計り知れない。詩人の自殺はその結果であるという。詩人の絶望から自殺への展開は唐突で、いま少し論拠に乏しい。

第Ⅳ部では、小説『英児』をとりあげ、顧城の言う「女児性」が、詩人にインスピレーションを与えてくれる自然を象徴し、詩の創作が「女児」と詩人の「天人合一」の体験であると論じる。しかし現実の英児は、顧城を裏切り、それによって顧城の「女児国」の理想は破壊され、自分の分身を失った顧城は、自殺を決意する、と指摘している。ここも理想の破壊から自殺への必然性が十分展開できておらず、顧城の思想の不毛性についての深い考察が欠けている点で、物足りないが、世界文学に数多い自殺した詩人の一例を分析したものとして、興味深い。

論文の章立て、用語、訳語などにおいて、不統一が見られること、引用ミスが見られる、誤訳があるなど、欠点も多いが、顧城の数多い詩作品および小説を丹念に読み、詩人の成立から死までを、手際よく整理しており、特に難解な詩作品の読解において、著者の苦労と努力が表れている。また中国北京市西城区文化館における顧城の活動など独自の調査に基づく記述も含まれている。総合的に見て博士論文として評価できると判断する。